

## 【研究会報告】

### 「外中華」映画の世界—ツァイ・ミンリャンとエドウィンに見る世代の絆

日時:2012年10月23日

場所:ハロー貸会議室 六本木

#### 趣旨

街には漢字の看板が溢れ、新聞・テレビでも人々の会話でも中国語が飛び交う世界。津々浦々の人々が中華文化のなかにあって、日々の暮らしを通じて中華文化を継承し、発展させている世界。そのような中華世界の外側には、中華世界とは歴史も文化も社会の仕組みも異なる土地に、中華世界に起源を持つ人々が暮らす土地が広がっている。地元文化の影響を受けながらも中華文化の維持がコミュニティとして進められ、中国語(華語)の新聞やテレビがあり、華語で教え学ぶ学校があり、多くの人々が華僑・華人としてのアイデンティティを強く抱いている土地もあれば、中華文化と地元文化が混じりあい、言葉や生活習慣の上で中華系とそれ以外の人々を区別することにほとんど意味がなくなっている土地もある。しかし、たとえ現地社会にすっかり同化しているかに見えても、あるいは、たとえ一国の政治指導者の地位を得るまでになっても、よい意味でも悪い意味でも「あの人は中華系だ」と言われることから逃れられないという現実も存在している。このように、中華世界と異なる地元文化のなかで暮らす中華文化の継承者たちは、それぞれが背負う中華文化の度合いは違っても、自らが中華文化の継承者であることを意識し、何らか

の形で自らの中華性を維持・発展させることへの内外からの期待や圧力から逃れられないという思いを抱えて暮らしている。このような、中華文化と異なる地元文化の中で文化や世代を継ぐことに人々が敏感にならざるを得ないような世界を、ここでは「外中華」(そと中華)世界と呼んでみたい。



「外中華」世界とは、中華世界の外側にあって、ただ生を営むだけでは中華文化を維持・発展させることにならないという状況で、自らが中華文化の継承者の1人であり、その中華性を維持・発展させることが期待されているという意識を抱きながら人々が生を営む土地である。中華文化の継承者として「外中華」世界に生を受けた人々は、好むと好まざるとにかかわらず、自らの中華性に向き合うことを余儀なくされる。中華性の維持と発展を自らの責務として誇りに思う人もいれば、「継ぐことの重さ」に耐えきれないと思う人もいる。そのため、その土地に留まって自らの中華性を追究しようとする人もいれば、たとえば日本人になろうとすることで自らに背負わされた中華性から逃れようとする人もいる。中国・台湾・香港といった中華世界との関わりの中で自らの中華性と現地性を捉え直そうとする人もいれば、英語の世界に身を置くことでグローバルな「アジア人」として自らを位置づけようとする人もいる。しかし、人は何らかの場所に居場所を定めてそこで生を営ま

なければならない以上、「外中華」世界に暮らす人々は、自らが生活の場とする土地に住む他の人々とどのように折り合いをつけていくのか、そして祖父母や父母が代々受け継いできた中華性をどのように受け取り、子や孫たちに伝えていくのかといった、空間と時間の両面での文化の継承を課題として背負うことになる。



中華世界に隣接し、中華系の人々が多く暮らす東南アジアは、「外中華」世界の代表格だと言える。近年、マレーシアやインドネシアの映画に多く見られるように、東南アジアを「外中華」世界として描く創作がめざましい。

ツァイ・ミンリャン監督は、「外中華」世界であるボルネオ島のクチンに生まれ育ち、中華世界に引き寄せられて台湾で創作の花を咲かせ、現代社会に生きることの寄る辺なさを描く一方で、古いものへの憧憬を描いてきた。その作品世界の多くは、登場人物の姿を見ても言葉を聞いてもまぎれもなく中華世界であるにもかかわらず、どこか現実離れした印象を与えている。それは、「今ここにある中華世界」ではなく、「外からまなざされる中華世界」が映されているということなのかもしれない。

インドネシアのスラバヤ出身のエドウィン監督は、長編第一作『空を飛ばしたい盲目のブタ』で、日本人になりたい男の子と、祖父の墓守をしようとする女の子を描き、インドネシアという「外中華」世界で「家と民族を継ぐこと」と「今ここで生きていくこと」の新しい折り合いのつけ方を暗示した。本来インドネシアにいないはずの者たちが集う動物

園で育った少女を主人公に据えた長編第二作『動物園からのポストカード』は、「外中華」世界に生きることの覚悟の静かな表明のようでもある。

本シンポジウムでは、第 25 回東京国際映画祭で来日中のエドウィン監督をゲスト・スピーカーとして招き、「外中華」映画の先駆者であるツァイ・ミンリャン監督と対比させながら、「外中華」映画の最先端を切り拓いているエドウィン監督の作品の魅力に迫りたい。「世代を継ぐ」ことをテーマに据えた「外中華」映画という見方は、映画の楽しみ方をさらに広げるとともに、今日の世界に生きる私たちに共通する課題について考える入り口にもなるだろう。

#### プログラム

ゲストスピーカー エドウィン（映画監督）

報告 1 野澤喜美子（編集者）「消えた家族の枠組み——ボルネオからツァイ・ミンリャンが求める幻の中華」

報告 2 西芳実（京都大学）「仮住まいの地を生きる——映像表現が切り拓くインドネシア華人の居場所」

司会：山本博之（京都大学）

主催：マレーシア映画文化研究会、京都大学地域研究統合情報センター共同研究『混成アジア映画』に見る世界」

共催：日本マレーシア学会

協力：東京国際映画祭